

再組織の件(連盟員地域的確認の件)・・・

ここで突然、小松さんの名があらわれ、しかも九州の会合に顔を出し、その席上の座長として、また引續き開催すべき西日本既試会召集発起人となり、その会場にて自筆を提出してゐる事業は、その二号あり

一 平民新聞七二号五月十四日号の、山松さんの對稿によつて明らかなである。(抄出・電報)

へふたたび戦列へ一覚醒の九州行

句後軍が疲れた階眠を捲り起すべく、岡山から高畑信一が来阪した。眼りと混乱からさめ、出席をうながされたる西部既試会へと、九州行を志す。

岡山での高畑と再会。此びの一夜、東京よりも村上義博来り居りて固き握手を交す。九州の井原、鶴君はじめ若き同志諸君とも会し、昔年の若き血潮を喚びさすまされる。

翌朝は、オールド・アナキスト新内初宣伝を志し、井原君と山陽本線車内販賣を共にする。初陣には初陣に

ふさわしい成績。

九州行は、井原、鶴、原田、高部、村上、一旦のくられて高畑と、立推の余地ない車中を立ら運して、佐賀へ。その夜後着の副島君をのぞき十三名、火を吐く討論に叛水た身を忘れ、後軍が味うことのできなかつた感激にひたる。

西部既試会当日、早朝よりの試事すでに四月の夕陽沈み、燈火なくして薄暗くなるを知らざるまで、卒お討試のつづく。かくまで熱心な若い人たちが見出し之にたとに狂喜し、長く階眠をひさぼつたこれを深く恥じた。

翌日、村上君と共に、車中宣伝を行いつつ、鹿児島へ。武良三君を訪れる。七高その他の学生による社会問題研究会のほか、高瀬、田元君らの新内宣伝行動などの展開をみ、力強さをみしひしと感ずる。停電の夜を深夜まで語りあかす。

武・高瀬、四元の三君に見送られて日豊線にのりこむ。別府で村上君とわかれ、自分は高田炭砒に古き同

志を訪問一泊して帰路へ。

山陽隈阿知須付近で新肉宣伝班にあつた。川野田支局の榎田君らの秀切つた熱アとうとうとのべる宣伝傳説に新米の旨分は大いに受附るところあり、それをきつかけに同車中の金沢の近岡氏とはからずも議論の花を咲かす。

三原駅下車。車外は眞暗を一色にぬりつぷされた劇。その中を訪ねて十七年ぶりの青山と顔を合す。往年の美青年も共にた眼鏡を手にする一感無量。近畿地区の連絡。滞在十二時間。小糠函ふる中を福山へ向う。

かつて一年余の過した尾之道監獄の高屏の一部が望まれる。健在な沢田武雄、彼とこんどの大会で再会できるとききよびにたえず。山口勝広、広島原予爆弾で倒れ、日野正善の消息絶ゆ。熱血児日野今生きてあれば必ずや行を共にするであらう。想いは遠ざけし二十年の昔にかえり、今見る車外の桜花、眼前の車中の有様……嗚呼

なつかしい古巣、福山。戦災で変貌した駅頭に立つ。

当時、総同盟の牙城たりしこの街に、沢田、山口と共に居を構え、福山泰民社として発足した。政敵欲に血迷つた彼らの通説会をぶちこやし野をり倒し、相叩つた。見ろ、あの当時の総同盟幹部らは、二十年後その口約束通り一貫途始したか。亀井貫一郎は軍服事件で数百万円のサギをしたとか。ある者は戦争能力者として、ある者は民衆の血をしぼる法律の発案者として、大衆を足場に己れの地位と名譽とを築くことのみ汲々としていたではないか。彼らの正体をこの二十年の歲月ははつきり物語っている。

昔の同志が私にあつたため、遠く府中から府中をやつてきた。現在の運動を話しあい、九州で計画した大阪中国……と山下の演説会に福山を入れるべく打合せ、串いの跡一僅かに焼け残つた公会堂を会場に、など話す。翌朝、同市の露宿商業組合の山形秀之助君を藤原彦憲の案内で訪れる。古い伝説、群雄割拠に等しい露宿業者、是正さるべき香具師の正態とアナーキーへのジレンマに悩む同君。今後、同志間の連絡が充分緊密な

るよう依頼して、再び岡山へ。

岡山高畑宅へ、往時中岡自由連合会の剛士、竹内走人訪ね来る。岡山自連当時の同志の消息、ある者は絶え、ある者は戦争の犠牲になつたと聞く。かくして再び戦列への十五日向を振り帰つて西日本成試会、南催のうちづく我家へと、旅を終る。凸

四月十八日十九日、西日本成試会が予定通り小松方でひらかれ、五月、連盟大会に対する西日本各地の提案事項など十二項目がきめられたが、多分ぼくが小松さんとはいじめてあつたのは、このときだつたと思う。いま何を思い出せないが、つよい印象で心にのこつているのは奥さんである。

火鉢の向うに坐つていつも手仕事をしてあられたがもう百羊の旧知のようにさつくばらんで「あ、いらっしやい。さ、はやあがつてんか」という気易さだつた。

小松さんとの会話を、友達同志みたいな口調で「カメサン、向井さんがきはつたでー」といつたふうだつた。そのころは子供さんはまだ川さかつた。

そのうえに、猿々居候ができ、新商会の連中がどつとおしよせたりして、生活も時には衆でなさそうだつたのに、ふと姿をかくすやうに出かけていくと「イーバ イやつてんか」と酒を抱えて帰つてこられる奥さんだつた。世話すきで何でも面倒をまかへてくれた小松さんだつたが、奥さんがあゝでなかつたら、とても半分の活動ができなかつたにちがいない。

なりふりがまわらず、いつもせつせと働いていて、気さくにものをいう、ぼくにとつてはほれほれする、いい奥さんだつた。その奥さんを見て……

さマオ三回全口大会は五月十五・十六日、東京芝中央中川会館で開催され、小松さんも上京した。そして大阪地方の全国委員に山口英とともに推された。

(当初から、全国委員だつた)連盟のこの大会前後から日中会試の方に代しく、連絡その他において交際の必要がまじて来ていた。そのころへ、丁度そのときリリーのバトンタッチのようになつた小松さんがあらわれたのだつた。し、ちなみにそのときの全国委員の名をあげてみ

ると次の如くである。(岩成) 柄沢理一(岩成) 石井惣太郎(群馬) 大島英三郎(山梨) 小島龍彦(長野) 鷹野原長義(新潟) 須藤部(東京) 植村諦、綿引邦農夫、水沼浩、細谷義夫、島津二郎、丁替鎮(埼玉) 大道守三郎(神奈川) 行木勇(静岡) 大塚昇(愛知) 小川正夫(岐阜) 長芝義司(京都) 山鹿泰治(大阪) 小松龜代吉、山口英(兵庫) 向井彦(岡山) 高畑信一、(広島) 青山大学(福岡) 副島辰巳(佐賀) 井原末九郎(宮崎) 原田理一(鹿児島) 武良二(福岡) 石川三四郎、岩佐作太郎。編集部長、植村諦、矢橋文吉、大道井三郎、布留川信、大門一樹、島津一郎、遠藤海久保護

としてあつた。へ平民新聞の列車内宣伝販売について、すこし触れておきたい。平民新聞が一冊編集局よりは次のように財政事情と訴えていた。『松岡紙をもちたいというのは、連盟準備会最初からの皆んなの希望であつたが、素興食の集りである我々には出来ない相談であつた。しかし一ヶ月も持ちこたせられる見通しがついたら、あとはどうにかなるだろう。その時はソロバンを捨ててやりだそうということに腹をきめていた。いよいよ時がきた。七とこ借りで一ヶ月足らずの目算がついた。急ぎよ計画を実行に移すことに決したのである。然るにその時、新田切替えによつて情勢は一変した。しかし矢はずでに弓づるをはなれている。われわれは本紙発行の意義を痛感し、同志諸君の熱意を信じ、敢てこの無謀の挙を決行するのである。……』

平民新聞列車宣伝販売の頃

さて、ここで日本アナキスト連盟が発足した当初から数ヶ月、アナキストの活動として、きわだった特色

このような財政事情と共に、新聞の配布網は、回田のおもいにとりあえず名乗り出たばかりの、全国に散在する、わずか数百の仲間には依拠する以外にない、という、すこぶる心細い状態で、新聞は発刊された。

それはもちろん、新聞発行がまず運動をすすめていく上での絶対要件であり、ともかくにもこういうことであつたにらがない。そして運動のカーブが、まず新聞読者を獲得し拡大することであり、またそのことによつて紙代を回収し、発行の維持・継続できるものであつた。

しかし全国の同志に10部20部とまとめて送られた新聞は、殆んどが無料又は回収見込みのない宣伝用として使済され、ごく少数の同志をのぞいて、完全に紙代が送られてくることがすくなかつた。(またそのような仕組みは、かつての運動の名残りで、その後ながくクロハタ、自由連合にも引続いて、新聞経営を悩ませるものであつた。)それは結果として、配布対象と範囲、地域を限定し、新しい未知の読者への働きかけの役割を果さず、消耗してしまふことに外ならなかつた。

このような状況で、新聞は、発足当初の態勢がどの位なかつたせいもあるが、週刊とは名のみで、半年間であらやく十号をだすという週刊ぶりであつた。

このようなとき、平井新聞の街頭サンドイツマン宣伝にはじまる、駅頭での立寄り、ついで列車内販売がたまたまはじまつたのである。

その最初の実行者は若佐老人であり、それに感銘して早速家族をもひきこんでやり出したのが福岡の副島辰巳さんであつた。

一九四六年十二月十一日平井新聞が九号に「九州平民戦線を行く―若佐作太郎」の記事がのつている。それが新安全伝販売について最初にあらわれたものである。

句：人の大波にもまれ押され押されて博多駅の改札口を出たのは去月十五日の午前十一時頃であつた。同行の近藤・山鹿の両君はと、足をこめた瞬間、不意に飛びついた三人の子供！大きな手柄をにたもののように眼をががやかした。「走んがポスター下げてるけん、すぐ見つかつた。」

私は走人だ。若い諸君のように役には立たん。それで走人なりに宣伝のたしにもなろうかと、何時でも、

どこへでも、ポスターをさげて行く。そして平民新肉
なりパンフなりを買ってもらうことにしている。

この子供たちは、遠い西新町のアナ連事務所から私
ら一行を迎えるための駅へやつてきた使者田、ふみ(11)
吉之助(10)茂樹(8)副島三姉弟である。子供達は
すぐ百年の知匠のように私のポスターを引張り、自分
たちのポスターを示すのである。

彼らは毎日このポスターを下げ、駅に出て平民新肉
を売っているという。ときに戦災孤児かときかれる。

宣伝のための平民新肉を売るのでと即士ばかりを發揮する。
「今日は五円しか売らない」とふみさんは云う。私が
どんなにかこの幼い即士たちのお迎いを感激をもつて
受けたことか想像して下さい。……□

だが、まだこのころでは、どこかへ出かけるときへ
そのついでにという、附随的な試みであり、新肉は
云わば、売れなくてもよし、売れて尚よしと云うよう
なものであった。そしてそのような、あらゆる機会を
とらえての宣伝行動に、むしろ重きをかけたものだつ
たようにおもわれる。

しかしそれは沢のようなことをきつかけに、さらに
新しい一歩をふみ出すことになった。

日一九四七年三月十二日平民新肉一九号入打まひ
びくー副島辰巳V : 先輩若佐をまねて、わたしも
昨年十月頃から、ポスターを前後に下げて歩き、旅行
のたびに平民新肉とパンフレットを売っている。子供
達も加勢するのと、当初は新肉の引受部数が少いのと
それに新肉がぼつんぼつんと出るので、たいして管は
折れずに消化していつたものだ。

やがて元氣のいい青年が出て来て、自分も売りたい
と云うので、引受部数を倍にした。ところが向のわる
いもので、土・土号がなかなか着かない。その青年は
学生で、切角申出たが三月一杯はできないから四月か
らにしてくれという。それは結構だが、土号から十三
号まで一緒についた。今年は九州で非常に興くて、わ
たしのところの豆宣伝隊もなかなか動こうとしない。
くずくずしているうち、十四・十五号とつぎつぎと新
肉が届いてくる。どうもうず高くつまれた新肉に笑わ
れているような気がして、ついに街頭に出て売ること

にした。

まず陣多駅の、東京行準急待合の群衆の中に出掛け
て行つて宣伝傳説をこころみだ。平民新聞は日本の
社会主義運動と共に発足した新聞である。大逆事件の
幸徳次郎らが日露戦争に非戦論を主張したものだ。
次に大杉栄らがオマニ回目的のものを出し、今度日本ア
キスト連盟がオマニ回目を出している。これ以外に無政
府主義の新聞はない。古々といつて最後に、共産党を
よく批判しうるものはひとり無政府主義者あるのみで
終戦後、共産党が時局の段にのり、巷に村にその暴威
を振いつゝあるときに、皆さん必読の新聞であるとい
つて結んだ。

私の周辺には知れなきつきつて求める者十人あまり、
同伴の豆脚士に目をやれば、三人が三人共各所で引張
りだこの有様である。またたく間に二百部の新聞を売
り尽してしまつた。かくいう親父も嫉しかったが、豆
脚士の良がようは一方でない。意気揚々として引あげ
た。

それから出かけるときは新聞も沢山もち、列車の中
電車の中、群衆を前にすれば必ず新聞と無政府主義の
宣伝傳説をやることにしている。市中廻りで二・三時
間数ヶ所廻れば、大概二百部位売つてくる。傳説は五
分から十分ぐらいやつてゐる。平民新聞の由来と無政
府主義をはつきり大衆の目にたたき込んでいる。無論
単なる好の心から買う人も多いだろうが、無政府主義
という名に親しんでもらうことが一番必要なことだ
と思ひ、大書したポスターを下げ、不必要と思われるほ
ど、無政府主義を大声で叫んでいる。

いまでは私以外にも、新聞を傳説している者、ポ
スターを下げて歩いてゐる者が続出して、なかなかギ
ヤクである。……

この記事のように、新聞販売は、①はじめ岩佐走
の創意的な試み、②外出や旅行の際、必ず胸と背に平民
新聞宣伝ポスターを吊下げることに始まり、③ついで、
それを見習つて副島さんとその子供達が、サンド
イツチマンのように、駅などで立売りをやりはじめる、

そして ③ だまつて立つてゐるのには、倍々教倍の大売行きがあることから、演説して売るといふ販賣方法が見出されて定着していつた。これは、片手肉での販賣から、販賣そのものを目的とすることに於て大きな内容(質)の變化である。④それは、まず副黨さんの周辺、福岡・佐賀の行動的な仲間の中に依拠し、新肉に記者がのせられることによつて、漸次、各地へとひろがつていつたが、⑤そのなかで新しい注目すべきやり方として出てきたのは、はじめ福岡・佐賀肉を集会で往復する際の一ついでに、進行中の列車内で、演説をして新肉を売つたことにはじまる、車中での宣伝販賣である。旅行中の人々の好奇心と無聊をかこつたのとして、しかも当時、用紙等の極度の不足による出版物のすくまかつたこと等の状況を反映して、それは当初、自分もおそろくほどの売行きをみせ、携行した数百部が、二、三時内の列車往復でたちまち消化するといふことになつた。それは又、新肉販賣を専らとして精力をかたむけると、紙代を東京へ送つて尚、一

心、小家族の生活を捻出しようるほどともなるものであつた。また列車内宣伝は、連絡のこれようがなかつた仲間や、思わぬ遠隔の地に同志をつくり出すのに大きな働きをした。

以上のような動きを、当時の平民新聞紙上から拾つてみると、昭和22年3月26日21号へ東京新橋での新肉立売り記―重野力。22号4月2日へ長崎支店開設―日博にのびる平民戦線。長崎市林田裕君より通信あり。全く外部との連絡なしに無政府主義研究会があつたこと。偶発的さま手にしてアナ連の存任を知つた。この林田君入手の8号は既報副島君の列車内新肉売りの成果なる由。15号5月7日へ新肉売りつゝ宣伝。佐賀駅など、今日の選挙投票日の前二三日間は数名の同志がつかけて各立候補者の政見発表のあつたに、政見は集団居直り強盗と批判、拍手をあつてゐる。ところが近時鉄道権力の末端との摩擦が各所で激化し、構内演説をとめられ、列車内新肉売りをやめさせらるたり、ある所では暴力沙汰までおこる中で

心、小家族の生活を捻出しようるほどともなるものであつた。また列車内宣伝は、連絡のこれようがなかつた仲間や、思わぬ遠隔の地に同志をつくり出すのに大きな働きをした。

青匡同志は、うまざたゆまず憲法売りを続けている。27号

5月21日へ機会は常にある。選挙陣争で痛感。佐賀

牛津支局の鶴善之君が四月十八日佐賀駅頭で

謝脱しながら新肉売りをしていた折も折、参议院候補

の連中が殺倒してきた。例の如く、清き一票を：御同

情を：と乞食の本領を發揮した。鶴君すかさずこれを

徹頭徹尾やつつけて、無政府主義の立場より選挙の意

味を明らかにし、乞食をふるいあがらせた。なかに

は鶴君の知人を通じ母成を申しとんできた奴さへあつ

た。：二五日は投票日。二四日は又乞食共が佐賀駅頭

に押しかける予想をたて、鶴君と二人、副島派の看板

をぶらさげて出かける。駅につくや否や、いつもはよ

けて通る巡査君親しそうに話かけてくる。「平民新聞

は売れますか」「警察と税務署と政府と共産党を

叩けば、物凄いほど出ますよ」「警察を叩くのは何と

かなりませんか」「記者受つて答えず、入れかわり立か

わり佐賀駅頭をおそう。毒舌に、駅派出所より母成を

申しこんできた。：例の通り駅が出張つて「どうも困

りますね」と注意にくる。：大話のに又駅より注意。

「あなたの方のおつしやることには賛成ですが、なにし

る選挙中で、取締りが立つてきているものですから」

と割合話のゆかつたはなし。「なるべく遠慮しましよ

う。しかに余りにも乞食共りがひどいものですからお

と述げる。「選挙が終つたからといつて大つびらでや

つてもらつては困りますがね」：(井原) 凹

27号6月11日入至る処に権を✓ 鹿兒島の同志は全

国大会から帰国して以来、徹底的に街頭宣伝にのり出

しています。：町田、四之、徹の三君は毎日のように

平民新聞をか、えて人だまりへ出かけてゆき、町田君

が演説をやつています。近く熊本宣伝をやる計画をし

ています。：凹

ついで31号6月25日入困難日が果しくもある。新

肉普及陣争記✓同じく、歴史支局発で八咫う宣伝行

九州地方連絡しきり✓で、熊本行・宮崎行、また六百

部をか、えて種子島行と、毎号のように記事がつて

いる。そして八新肉普及陣争記✓とあるように、新肉

販売が連日につきき活版にいよいよなるにつけ、ようやく権力側の対応も、革なかれ主義から変化して露骨に弾圧、妨害が出てきた。またそれへの対応からトラブルが起りはじめたようになってきたのである。

さて、さきに平民新聞発行について、ほとんど財政的な見透しがないままに創刊されたことをのべて、その後の経営はどうなつていつたか。

当時は極端な紙飢饉で、市場には闇相場が横行していた。一方、出版物は、まず何よりも用紙の不足で、左翼をも制限されていた。しかし占領軍の最初の政策が、比較的左翼系の出版物の用紙割当がうけやすかつたと思われる。その風潮に便乗し、また強引な折衝をもふくめてアナ連の平民新聞用紙は、実力以上の量を受けることができた。近藤・遠藤両氏がその歩に当り、従つてその用紙のやりくりと職務にあつてはいたが、経営の必要上、割当をうけた用紙をさいて、闇ルートに売却した差益で、平民新聞発行継

続の主要資金にあてていた。しかし勿論それだけでは追いつくまでもなく、六月十五はオ一号を発行し、週刊を称しながら、順調に週刊が実行され出したのは、18号昭和22年3月5日以降のことである。

これは、この数ヶ月前より、九州の新聞宣伝販売が順次活版化するにつけ、その消化販売紙数が見るみる拡大し、かつ紙代が順調に納付され出した頃と対応をあわせている。そして、各地に新聞宣伝販売がひろがり、紙数増の要求と共に、編集部は、用紙割当の余分がなくなり、闇へ紙を売ることもなくなつて、財政はようやく正常化しはじめたものと思われる。またその印刷部数も、はじめの数千(東カとして三千を完全)に配布できたろうか? としてその回収は、カンパを入れなければ10%ぐらいのものではなかつたか? が新聞宣伝販売の割合のみで異常に膨張して、昭和22年5月(前右)カニ回大会(五月十一日・東京日赤講堂)には、おそらく一二部を越え、その最高潮期となる。7000部ごろは、二万三部、そして割当用紙

量があつて不足して、各地の増部要員に対し、あべこべにやりくりして押さねばならぬ状況となつたのであつた。

昭和22年10月18・19日、さきの全国大会の申合せにより全国委員会が召集されたが、それに先立つ平民新肉44号10月10日通信らへは北九州、新肉宣伝隊、大挙上京せん✓ヨ：全国委員の副島・井原は無論：佐賀の新肉宣伝隊がほとんど上京の予定。上京の途すがら中国から関西まで新肉をまくつもりで、委員会期日の六日前に九州を出発し、三隊に別れて途中三泊の予定。佐賀新肉隊は、東京滞任中も活動したく、新肉をそのつもりで準備されたし。副島と報じた。また、

53号12月19日は新肉増刊のために、全国の同志諸君に訴うー平民新肉はより無政府主義的であれー北九州新肉宣伝班、副島辰巳✓ヨ北九州に於けるアナ連の重要な仕事は、平民新肉を列車内及び駅構内で、鉄道や警察官吏の注意を排除して、販売配布することである。吾々の運動の段階がなお啓蒙を控へられず、主

義の宣伝というより無政府主義という文字の広告の時代といつて過言でない現在、我々は新肉宣伝に充分な意義を感じている。…新肉活動のために吾々が得た便益は過去一年間に教えるものがある。一、旧同志との連絡。一、無政府主義者でありながら時前極共産党に加入せし者の復帰。一、中組内における自主的分子との連絡。一、青年同志が鉄道員との申争を通しての申争心の教化。一、鉄道四部に於て上役の独善的命令への自主的批判及び反抗。等々、とくに列車内申争の教えるものは特筆すべきものがある。

吾々は北九州だけで一万部余の配布割当をうけている。九州全域において一応の役割を果した感があるので、十日の全国委員会後は、本州に活動の分野をひろげ中。部地方の同志との連絡を保つて、力の七割を中部地方に向けている。ところが紙数不足のため新肉活動に大なる支障を来している。編集局としても、恐らくこれ以上我々に割当てることは、現在の発行部数からみても不可能であろう。しかし新肉は吾々の場合いぢは小銃

弾である。：内閣で割当てる紙を少くとも十万部まで
高のねばならない。今週はじめ佐賀新南班の井原・山
山の両君が東北地方宣伝のため上京した。これは新南
増補のため内閣に要求する意図も含まれている。あそ
て全口同志に訴える。吾々は進むべきである。たゞ進
むべきである。なお一言付け加えておきたいのは、吾
々が新南販売の場合、無政府主義について五分くらい
説明する。その際「君のいうことは大要結構である。
日本は革命しなければどうにもならぬこともわかる。
しかしこの平民新南をよんで君のいうことと非常に違
うところを発見する。これはどういう訣か」という質
問である。一部に無政府主義という名称では大衆が背
を向けると主張する同志諸君がある。或は地域的にそ
んなところもあるかも知れない。しかし九州と云えば
終戦まで無政府主義活動の歴史をもつていなかった後
進的地帯であることを第一志願したい。かかる地域に
してそうである。時代は吾々の頭よりうんと進んでい
るのではないか。：それで全国の同志諸君に再び訴え

たいのは、平民新南の内容を無政府主義にふさわしい
内容に盛り上げることである。社会革命を主張する吾
々の立場と主張をばつかりと示すことである。そのた
めに全国の同志諸君の遠慮ない志願で新南をうめても
うりたい。吾々地方にある者の意見と能力の不足が、
新南関係者のみの狭い意見に支配されがちとなつてい
るのは、否めない結果である。：口一（この副書さ
んの文章は、戦後アナキズム運動史の、いわば八平民
新南列車販売闘争時代）ともいふべき頃を表現した注
目すべき資料である。）

さて、この文中で北九州新南宣伝隊の中国地方への
進出がてくるが、その概算となつたのが岡山の高畑
（のら藤井と改称）信一さんのところであつた。全国
委員会へ上京の途次、岡山へ立寄つた副書さんは、
一夜の話し合ひで、おそらく高畑さんのその後の大きな
能力、運動への献身をひきだしたにちがいない。

以来、九州の新南隊は、岡山を根拠とし山陽線はも
とより山陰その他の支線へまで、その活動を展開しは

じめた。そして高畑さんは、印刷の経費と奥さんがやつていた洋裁学校の収入その他の殆どを投じて、宣伝隊の衣食住を世話し、ともに生活を営む、辛苦の道へと飛びこんだのであった。

高畑さんから、大阪の小松さんへという連絡経路は、戦前共同生活を共にし苦果を分かちあった二人の間柄から当然、想像されることである。

川松さんがアナ連の戦列復帰はすでに前述のとおりであるが、新岡宮伝隊が山陽道を席卷しつつ、さらに、近畿へと進み出るような状況が出てきたころ、高畑さんの呼びかけ、訪問などによつて、一躍、仲間へと加つてきた、というところが云える。

昭和二三二年二月十日付でカー一号を発刊した入無政府主義会誌は次のように入新岡会報告一副島辰己のつてゐる。□：メンバーは半数の者が生活を省ず、新岡に没頭している人達である。昨年十月誰かうとなく新岡販賣利益金を積立て、運動資金、扶助金、共同事業資金に充てることに相違がまとまり、会員全部

の生活を共同で守ることに相違がまとまり、平新田四号より始つて、本社押し一円の外五十枚計一円五〇枚を各自は責任者副島に払込む。発足当初の組成員は、六名。積立は六万円に達した。一月五日西日本復讐会に於て本年の計画及び増員がなされ、高畑(岡山)吉良、山口、山口(佐野)小引川(福岡)の新加入計十一名となつた。：事業計画は、印刷業担当高畑鶴。播磨製塩担当吉良。玩具仲買井原。博多人形製造小引川、副島で、本年初頭、新岡会とは別個に、資金を無條件合同、三月を期して新岡会に合流する態勢をとりのせている。さうまでもなく会員は全員が運動に没頭する意志を表明した者はかりであり、仲間中の希望者は広範囲に包含してゆくつもりである。□：このような状況のなかで小松さんは、家業の「金屋」に、加工工を家人にまかせて、ひたすら運動にかまけるようになつて、いつたのだった。

つまり、北九州そして岡山がづくり出さうとしていた、運動を核とした生活共同体に、参加すること

は(距離、連絡、関係の上で関西の運動の独自性もあつて)やらなかつたものの、それと呼応するかたちであるいは、それを支援するかたちで、大阪の小松さんの家は、往來する同志仲間の根拠地となり、また若い同志が、小松宅に三倉算會して、象徴的な何人も暮すというふうな事となつた。(江口幹・猪又へいま松原信)、梅井陽三、とくに後者三君は、小松さんと切つても切れないう話になつた人々である。)

一方、それまで大阪の運動の長たであり、中心であつた逸見さんが、日帝全試で忙しく、いつとはなしに手をひくという事で生じた空白を、小松さんは非常な努力でうすめ、新しく山口典程らとともに中心となり、その人々を育てるという役割を果した。パトンを若い人に渡したのちも、常に背後の夏守り役、相談役として、最後まで、関西の人たちの心のより所であつた。

さて、姫路で取扱つた平民新聞は20部位それから50部、そして、昭和23年はじめの頃は百部ほどであつた。

(この百部という数字は、新聞宣伝販賣をすることをのぞけば、比較的多い取扱ひだつたとおもう。しかしその實際の紙代回収からいくと、約五十は当然発行しては詩詠イオムの寄贈先(詩人たちが主)に同封

のこり四十は姫路の読者友人などへ送り、十部は手許予備だつたが、そのうち紙代、カンパが入ってくるのは、約二〇人位のものでつた。だから完納とはいかず大分紙代が滞つていた。) 北九州の新聞宣伝の記事に刺激され、滞納紙代の整理のためにも、一度新聞宣伝をやつてみようと思ひだしたのは、たしか姫路公会堂で若佐老人を招いて講演会をやつたとき、岡山から佐野新聞社の小山ひななども馳せつけ、列車宣伝の見本とばかり演説をぶつた。それからこのことであるが、それでも何か思ひきりかつかず、いよいよ十二月になつて年末資金をすこし東東へおくらねばならなくなつてもうしや二む二といった気持ちであつた。会社を午前で早退して、姫路から上り大阪ゆきののり、約一は岡明石一つ手前の太久保駅で、10分の待合せで下り列車

で打返すというコース。樂するより生むがやすく、二時前後には、もつていつに新肉を金都空にして、ポケットには十円玉がザラツとあまはいつていた。

それから、週一回、のちいせ、鴻野君ら若い人も時々、手伝うようになったので、次々に部あそびやしたしか、放教の最後は、四五百部だった。もろ様子は、平民新聞80号昭和23年7月12日入新肉宣伝随伴記一

(雑誌)母田君手記 14日に子供がなくなつた……なにが子供のめい柄を弄うような気と、さびしさのまじれにもと、一ど何井のあとについてみてみようとおも

いたつた。「さあどうかな、まあそれはお前の気持次第から」とあぶなつかしげに思案したあげく「じゃあ久しぶりについてみようか」ということになつた。

あくる朝、急に私はこのほそく「いよいよよぼんとうになつてしまったのか」としりぞみた。いほど胸がどきどきする。とても私にはカンバンを胸にかける男

気がでない。ともかく売るべきでなくても、新肉持ちぐらゐはしようとしてお位か、え、五六はあくら

あとを歩いた。……何井が切符をかつてきて渡すと、先にどんどんホームへはいつていく。汽車にのりこんだがあまりに混んでいない。やがてベルがなりすく動き出した。とおもうと、何井はちよつとふりかえつて

私を更で、それからとつぜん「皆さん」と声をあげ新肉の紹介、それから反戦論と演説まじはじめた。

ふだんあまりききなれない、あまりに大きい声と、乗客が急にだまりこんでしまつたのに、私はおもわず全身が熱く、かくしまいたカンバンを夢中で胸にかけ

ていた……

何井は一しまりしやべると売りすかうと人と人の車へとす、んでいく。私は小さい声で「無政府主義の

平民新聞」といつてみたが、ビツクリしたようなまわりの顔がジロジロとカンバンと私の顔のみるだけで誰も買つてくれそうもない。半分ほど車中を歩いたと

ころで肩をふりかけ、ギョつとふりかえると、若い男の人が「いくらですか」と言つてくれた。「ア、ア、ア、うごげいます」とていねいに額をさげると、ちよつと

涙がこぼれそうであった。その人を見ると、もう新
肉をひろげてみている。しばらく歩くと連結のところ
で、朝鮮の人が一部だまって男つてくれた。あとはい
とつと売れまい。若い女や女学生がめづらしそうに
私をみてヒソヒソ話しあっている様子。そこが通りぬ
けにくくて、おもわず立って佇んでいた。と向うの方
から手拍きをしている。近づく、「だまってないで、
平民新聞と位は声を出さなくてな」という。加吉川
をすぎるとひどく湿んできた。向井はまたびんく前
へ行っている。「ごめん下さい」とやつこの思いで中
へはいると、二人連の男の人が罵つてくれた。それで
すつかり元気がでて「無政府主義の平民新聞」といつ
てみると、又まこのおじさんが一部、そして「さあず
つと前へゆきなさい」とと路をあけてくれる。順々に
路がひらいた。ようやく峠石。しらべてみるゝわたし
の今は九部うれていた。「まあいいさ。大出まが。
ずつと車の中をわたつてあるくのは、つかれたらうじ
と向井がいつてくれる。新聞宣伝つてくさんの

はなしてユカイそう分ものとおもつていた私は、なみ
なみならぬことに、いまさら目をみはるおもいだした。
にあるように、それほど飄爽としたものではなかつた。
むしろぼくなど、列車にのつてや一声をあげるゝその
瞬間まで、何か淋しく心細く、足がみして便所の順番
をまつような、ときには、ごおつと秋風が胸裡をふき
ぬけた。それでも関西では、ぼくが一番先きにやり出
したというので、「先生格」で、ある時の関西地成例
会で、一日全日で宣伝販売をやることに申しあわせ、
川松さんなども、胸についた看板ものものしく、大
阪の天守まきから、小松さん魂ばりの関西衆にのり
総勢で十名ぐらいが、奈良ぐらゝいまでを往復、ぼくが
模範的？実力を示したことがあつた。それから、小
松さんのとくに居位していた猪俣君は、宣伝販売のや
り方をおぼへるため、半月ぐらゝい、姫路へやつてきて
新聞をうつたりした。

そのころか、新聞宣伝販売は、次々にきびしい取締
りによつて、それとの対応がすまざるきびしいものと

なりつゝあつた。一列

一列車を全部あつてうごくうち、必ず車掌と出合
う。ぼくはデツキあたりで車掌が何うからくまのをみ
ると、やりすぎすまで海蔵を遠慮したが、その最中に
先方が車中へはいつて来たときは、中断してやめるや
けにいかない、コ困りますね。やめて下さいし「デツ
キへ来て下さい」というのと、何か恥かしさうに通り
すぎさる者で二種あつた。前者とは当然、口論が生じ
た。デツキまで引きずり出さうとするのもいた。それ
に抵抗すると、連絡して、次の駅で鉄道公安官がのり
こみ、ムリヤリに連行される、ということになつた。
このころから鉄道公安官の制度が生れたのだと
思う。そして属警乗しだした。それとの言葉の
やりとり、抵抗の仕方、などいろいろあつて、その時
々に束をためて、新岡乗りを取行したか、そのトラ
ブルの時向丈、新岡の馬車行きが、おち、くたひれが多
くなる、というのも又やむをえないことだつた。
そして、それはやはり多分に、精神的に意欲をく

しくものであつた。へぼくはおかけて、姫路と加古川
の公安皇勤務の公安官とは、ほとんど顔見知りとな
り、ときどき、悪質、常習といふことで、送検された
。これはその後の市川運荷や、夜全斗おその他のた
めには、よい経験になつたともいえる。

平兵衛新岡の号照和野手7月19日には、大坂での新岡
売りの打込を一目させる山松さんの実務がのつてい
る。へぼくは検査見聞記―法律は誰か守つてい
るか。関西線の買出し列車と足評ある湊町発上り三〇二列車
に新岡宣伝を兼ねて、噂に聞く食糧買出検査の現状と
取締状況を伺まべく乗り込む。今迄数回同じ意図の下
に新岡宣伝を行いつつ不幸にして一ども現状に立合
わなかつた。「食糧管理法とはどんなものか。それを
守ることは死の淵に追いやられることである。大臣知
事、警察署長巡査がそれを守つているか。」と一巡しや
べりながら王井駅のホームへ列車がついた瞬間何かあ
つたという感がピンときた。大急ぎ最後車から走り出